

その後わかってきたこと・・・現場の吉田昌郎所長の涙と自衛隊

絶対大丈夫です、と言うから自衛隊はいわば平服で事故收拾にあたろうとした。ところが水素爆発のために（これも後日職員の怠慢によるらしいことがわかった。）隊長は怪我をしてしまった。そして、現場にいなかった自衛隊幹部を怒鳴りつけた。あの理知的で温和な隊長の態度に居並ぶもの皆絶句した。

東電に関してもそうで、遠く離れた東京から現場を視察することなく次々に指令を出す。吉田所長は、「やってられない！」と吐き出すように言う。すべての責任や後始末を所長一人に押し付けて安全なところでぬくぬくと暮らしてきた。

この吉田所長、なかなかの硬骨漢で菅が何の役にも立たないのに現場にきたとき、青山繁晴さんの表現では「シカトした」。つまりソップをむいていて、「内心このバカが早くいなくなれば、一刻を争う事故現場の收拾に邁進できるのに・・・」というわけである。事実、この無能な男のお蔭で打つ手打つ手悉く後手にまわり、結局はメルトダウンをひきおこしてしまった。・・・しかもパニックになるから、とかなり後になってから公表した。その間、被爆者は当然ながら予測以上に増加した。

しかし、この吉田所長がいたからこそ、この程度の被害でくいとめられた、と考えている人は多いだろう。「東京からは誰も来ません。まあ、我々は我々で、がんばるしかありません。」・・・痛烈な皮肉なのだが、東電幹部には理解できない。

さて数日後だったか、自衛隊が赴き、消防隊も一緒に参加した。このとき、握手をしながら、自衛隊員の言葉に落涙したのである。いや、号泣したのである。

『安全です』と言いながら事故をおこしてしまった。」と所長は深々と頭を下げたが、返された言葉に耳を疑った。「大丈夫です。もう隊長も復帰しました。最後はわれわれが必ず助けます。」責められ、罵倒される覚悟だった所長の眼からぽろぽろと涙がこぼれた。（「日本に自衛隊がいてよかった」産経新聞出版）あるいは「大丈夫です、もし新たな事態が起こったとき、我々は命を賭してあなたがたを救出します！だから安心してください！」と自衛隊と消防隊の幹部が語ったところ、所長は握手の手を強く握り締め、そして涙が溢れたともいう。居並ぶ経済産業省の連中は、所長のこんな姿をみたことがなかったから腰が抜けるほど驚いてしまったらしい。それほど気丈な姿しか見せてこなかったのである。

ことほどさように国難は一致団結して物事に当らなければ解決できないのである。わけもわからんオネエチャンが、自衛隊員が白昼堂々と迷彩服で電車に乗ってきたと非難する。こんな馬鹿なオネエチャンもいれば、NHKのように人民解放軍の活躍を放映するくせに、自衛隊の活躍を快く思わないのもいるが、さすがに今回は自衛隊を賛美するしかなかった。自衛隊の面々は、自分の家族の安否すら確かめることができなかつたのである。

自衛隊に反対してきた連中に聞いてみたい。このたびの大震災に際しての活躍をみて、それでも「自衛隊はいらない！」と言えますか？

自衛隊は、**あたかも予測していたかのように 2008 年にこのたびの震災被害地域における救難活動のシミュレーション**をしていた。大震災における自衛隊の救助や遺体捜索などの活躍に、涙を流して感謝する人もいれば、まるで下僕のように対処した馬鹿もいる。家族の捜索や遺品の捜索に対して涙を流して感謝する人に対し、「任務ですから」と若い隊員がさり気なく言う。子供の遺骸が収容されるとみな涙を流しながら黙々と任務に励む。

ボクは若い頃自衛隊員を診たことがある。患者もそうなのであるが、面会に来た子らが、姿勢もよく礼儀正しく話す言葉も歯切れがよくて、……今することもなく巷間寄生虫のように生きている連中をみるたびに、「徴兵制度が必要なのではないか」と思う昨今である。

……なんとでもお言い！アタシは、右翼反動日和見なのよ！

自衛隊員を町で見かけたら、声をかけなくてもいい。それなりの敬意をもって接すればいいのであって、なぜ初めから親の敵のように憎しみの目をもってみななければいけないのだろう？ 被災地の子供たちの中から「大きくなったら自衛隊に入る」という声はあちこちできこえたという。

ところが外務省（あってもなくてもあまり意味のない、無用論まである。さらには、外国で、特に米国で企業が痛めつけられていても知らぬ顔をする。敵にまわせばうるさいが、味方になっても何の役にも立たない。）の官僚など自衛隊員の生命を鴻毛のごとく軽く扱い、だれかが戦死でもすれば外交交渉に役立つ、くらいにしか考えていないのが大勢いるという。たとえば、90年代なかばにルワンダ内戦で難民の救助に自衛隊を派遣せしめた。装備は機関銃1挺と自

動小銃のみで、ほぼ丸腰。これでは、「死にに行け」と言っているようなもの。武装ゲリラに襲われた NGO の日本人医師も救出したら、朝日新聞など、自国民救出など越権行為だと非難する。馬鹿じゃなかるか。自国民を救出することのどこがいけないのか？（・・・小生など、捕鯨船の乗組員に怪我をさせるような妨害行為をおこなう反捕鯨グループなど、自衛隊が排除すべきだ、と思っている。やつらは、初めはノルウェイ船にも押し寄せたのだがボコボコにされたため、抵抗しない日本船にやってくる。これに対し、外務省が役に立ったという話は聞かない。）外国でなんらかの被害にあった日本人の保護をするのも外務省の仕事のひとつではないか。

で、これらの自衛隊の活躍に報いるに、制服で民間航空機に搭乗するのは仰々しいから認めない、という嫌がらせをする。当初の目論見と違って誰も死ななかつたからである。・・・誰もまともな着替えなど持っているわけがない。年末の日航機に搭乗したとき、ひどい身なりの集団に周囲の乗客が驚いたという。このときの日航機のパイロットが偉い人で、「このたびは任務を終え帰国される自衛隊員の皆さま、お国のために誠に有難うございました。国民になり代わり機長より厚く御礼申し上げます。当機は一路日本に向かっており

ます。皆さま故国でよいお年を迎えられますよう」 周囲の客席から拍手が沸き、その輪がやがて機内一杯に広がって行った。

機長は乗客リストを見て自衛隊員の帰国を知り「日本人として当然のことはただけ」

成田に着いたあと 65 人の隊員はコックピットの見える通路に整列し機長に向かって敬礼した。(高山正之さん。週刊新潮 '11.6.9.)

仕事で外国に行く航路の機長にはよくわかっている、外国でいざというときに頼りになるのが誰であるか。(このときの表題が、「ぼろは着てても」)

そのほか、いろいろな人が今回の自衛隊の活躍を記している。被災者に風呂は譲って自分たちは汚れた体のまま雑魚寝を続ける、2ヶ月以上休暇なしの連続勤務であることや、雨の日も風の日も黙々と国道の瓦礫を片付けてくれたのは自衛隊だ、と被災者が労をねぎらう。

反自衛隊キャンペーンをはっているのは、朝日と共同通信だというが、すべてのマスメディアがそうだ、と言っても過言ではないのではないか。公の報道機関が偏った報道や誤った先入観から報道するのはいかなるものか。NHK も同じ穴の貉である。(自衛隊機の墜

落事故など、嬉々として報道している。) 自衛隊蔑視に走る理由がボクにはよくわからない。官僚までもが利用するだけである。外務省など、間違った利用をする。軍事力を背景に外交を行うのが世界の常識なのではないか。

自衛隊を丸腰で送り出せ。隊員が殺されでもしたら世界の非難を浴びるのはイラクだ、という趣旨のことを新聞の投書欄に掲載してあったという。・・・60歳にもなって馬鹿じゃなかろうか。世界の常識を理解しようとしていない。まして投書欄に掲載すれば、その新聞も同じ意見だろう、と曾野綾子さんが侮蔑とともに書いておられた。

2011.12.08.